

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 132 回 雪に負けるな！～日本人の故郷^{ふるさと}を大切にしよう！！

2006 . 1.15

青森、秋田、新潟、福井等日本海側や長野、群馬を中心に記録的豪雪による被害が、益々大きくなっている。毎日のようにテレビで放映され、今更ながら、自然のパワーの恐ろしさに驚愕するばかりである。90 名近くの死者を出し、雪の重みで倒壊した住宅（一部倒壊を含む）が 1050 棟を越すと聞けば、もう、これは「大災害」と認識すべきであろう。（1 月 14 日現在）事実、韓国はじめ諸外国からの支援も届いている。

しかも、一過性の天災ではなく、雪はまだまだ降り続く。融雪水の大量使用による地下水の枯渇、それに伴う地盤沈下、雪崩^{なだれ}や土砂崩れ^{どしゃくず}等、二次、三次の自然災害の恐怖、農産物等の莫大な経済被害、市民生活や社会環境を平常レベルに復活させるまでに、どれだけのリスクを背負うことになるのだろうか？

縦横 10m の屋根に 1m の積雪があった場合、その重みはおよそ 30 t と言われている。それが 4m 近く積もれば、どんな頑丈な家屋でも、これはもう、建築基準法の想定外。豪雪被害でも、被害額 20 万円以上なら、住宅総合保険で...とは言うものの、はなはだ「お気の毒」と言わざるを得ない。

豪雪地域に生活する人達は...

やたら便利でセコセコした都会に住む人種から見れば、（不適切表現だが）奇異に映るかも知れない。朝起きたらまず雪掻き^{ゆきか}、お爺ちゃんも孫も、明日また積もるのが分かっている、雪掻きから一日が始まる。電気もガスも、水も十分でない暗い居間で、ミシミシと家屋が軋^よむ音を聞きながら暮らす日々は、とても耐えられない。

「仕方ねーべさあ、雪が止むのを待つしかねえ」

「先祖代々の家捨てて、どこさ行けるべか？」

いかにも、同情顔した都会っ子アナウンサーのインタビューに答えるお爺さんの瞳は、強固な意志が光っていた。

毎日都会で生活している我々は、それが当前の如く考え、意見を述べ、情報たるものを発信している。山の手線や私鉄沿線で生活する者、時刻表は要らないだろう。鉄道がない、電車があっても 4 時間に 1 本という地域が、まだまだ沢山あること、忘れてはならない。経済的価値以上に、人間的価値観が基盤にある地方は、底抜けに、大らかである。都会人のようにイライラしていない。他人への労わり^{いた}や、自然への優しさを忘れていない。

「自然の恵み」への感謝があるから、自然に逆らわず、自然災害にも耐えられる。

日本人の「精神的故郷^{ふるさと}」が、インタビューに答えるお爺さんの住む地方にあった。IT だ、グローバルだ、と言って、毎日時代の潮流と格闘している現代都会人、気がついたらストレスに侵され瀕死の重症になっているかもしれない。

あのお爺さん達、なんとしても豪雪に耐え抜いて頑張ってください...心から応援したい。